

男子部中等科

「私たちの『ごみ』の行方—ごみの追跡を通した暮らしの再検討—」

菅野広樹

Q：学業報告会でこのグループを第一希望にしたのはなぜですか？A：「なにより、普段ごみを当たり前のように捨てるが、なぜ、当たり前のように捨てられるのか？どうなっているのかを知りたかったからです。」（本グループエントリーシート・中等科2年生S君の回答より）

今日、ごみ処理をめぐる問題が注目を集めている。中国から発された、「2018年1月1日より外国からのごみ輸入禁止」の知らせは世界に衝撃をもって伝えられ、世界の廃棄物処理方式に大きな影響を与えた。その後、同様にごみの輸入国であったインド、マレーシア、ベトナム、タイなどの国も相次いで「海外ごみ」を規制する政策を打ち出している。そもそも私たちは自国で出したごみを自国で処理することなく他国に送っていたという事実には愕然とするとともに、何ともしがたい憂鬱な気持ちになる。

冒頭の生徒の言葉の中にある、「なぜ、当たり前のように捨てられるのか？」がまさにこのグループの道標となった。私たちがごみ箱に捨てたごみは誰によってどのように処理されるのか、ごみ処理にかかわる様々な施設への訪問やインタビューを通してごみの行方を追跡した。そこから見えてきた事実をもとに、私たちの暮らしを再検討した。

I. はじめに

1. 活動の目的

私たちが生活の中で出しているごみがどのように処理されているかを調査し、調査結果をもとに再検討した暮らし方を提言する。

2. 参加者

本グループは募集の段階で男子部中高生に広く募ったが、結果的に参加したのは全員中等科生であった。参加者の構成は、1年生4名、2年生6名、3年生5名の総勢15名である。

3. 活動形態

「百聞は一見に如かず」ということで、実際に自分たちの出すゴミに関わる施設のフィールドワークを中心に構成した。私たちが排出するごみの処理の流れを理解するだけでなく、そこで働く人々の取り組みや思いに触れることからの学びを重視している。

まずはグループ全体でフィールドワークを行い、それぞれの関心をブラッシュアップした上で、5つの小グループに分かれて探求を進めた。

最終的に、各グループの探求内容をポスターにまとめ、報告会のポスターセッションで報告した。

4. 活動計画

本活動は以下の表1に示す通り計画・実施した。

表1 活動計画（日付はいずれも2019年）

11/12	探求テーマの確認・情報の整理 A. 柳泉園組合（ごみ処理場）見学
11/13	B. 東久留米市ごみ対策課訪問 訪問と見学の振り返り
11/14	<u>グループ探究開始</u>
11/15	グループごとに資料を用いて探究活動
11/16	中間発表会（グループ内発表） 活動1週目の振り返り&個人レポート
11/18	グループごとに資料を用いて探究活動 C. 街頭インタビュー(1グループ) D. 最高学部吉川慎平先生 インタビュー ポスター作り・発表準備
11/19	ポスター作り・発表準備 E. 大生運輸（運送会社）訪問
11/20	F. 東京都廃棄物埋め立て処分場見学（江

東区青梅・東京湾) [東京都環境局]

11/21 リハーサル・発表準備
11/22 前日労働
11/23 学業報告会当日 (ポスターセッション)

II. 活動内容

生徒が行ったフィールドワークを中心に活動内容を紹介します。なお、以下の項目は表1活動計画(日付はいずれも2019年)に対応している。

A. 柳泉園組合(ごみ処理場)見学 11月12日

柳泉園組合は、清瀬市・東久留米市・西東京市の3市が協力してつくったごみ処理施設である。主に一般家庭からの「ごみ」や「資源物」を処理している。本学、東天寮や清風寮などからのごみは家庭ごみとして処理しているため柳泉園組合に運び込まれている。

こちらの施設へはメンバー全員で訪問し、職員の方の案内の元、ごみ処理施設とリサイクルセンターを見学した。(写真1)



写真1 柳泉園組合にてガイダンスの様子

B. 東久留米市ごみ対策課訪問 11月13日

ごみ対策課では、市内の家庭ごみの処理業務や連携事業者との連絡調整を行うとともに、市民からのごみ処理に関する声を聞き課題の改善に取り組んでいる。

こちらにもメンバー全員で訪問した。事前に質問内容をお伝えし、訪問時に応答いただく形をとった。生徒からは多くの質問がでた。(表2)(写真2)

表2 生徒からの主な質問

- ・中等科3年生N君「東久留米市では1日にどのくらいのごみが出ますか。」
- ・中等科3年生S君「東久留米市で出たプラスチックごみのその後の行き先はどこですか。」
- ・中等科2年生Y君「ごみを減らすための市として取り組みを教えてください。」



写真2 東久留米市ごみ対策課職員の方々と記念写真

C. 街頭インタビュー(1グループ) 11月18日

あるグループは人々の「ごみの分別の意識」に着目し、学園内と池袋駅前とでアンケート調査を実施し、比較分析を行った。

D. 最高学部吉川先生 インタビュー 11月18日

学園内のごみ処理に詳しい最高学部の吉川慎平先生にインタビューを依頼し、メンバー全員で学園内のごみ分別に関してや、これまでの学園の取り組みについてお話を伺った。

E. 大生運輸(運送会社)訪問 11月19日

大生運輸は東久留米市内にある運送会社で、環境事業部ではごみの回収・運搬を行っている。当該企業で扱われているごみの運搬業務は、東久留米市委託業務、事業系ごみ業務、粗大ごみ業務の3つに大別される。自由学園のごみの大部分は事業系ごみとして大生運輸によって回収されている。

今回、関心を持った2名の生徒が訪問・インタビューを行った。(写真3)



写真 3 大生運輸の職員の方との記念写真

F. 東京都廃棄物埋め立て処分場見学（江東区青梅・東京湾）〔東京都環境局〕11月20日

東久留米市を含む多摩地域 25 市 1 町のごみは日の出町で最終処分されている。柳泉園組合などの清掃工場が出た可燃ごみの焼却灰はエコセメントなどにリサイクルされる工夫がなされている。

一方、東京 23 区のごみはあまりの量のため、処理時間やコストなどの観点から、焼却後のエコセメント等へのリサイクルは行えず、焼却灰をそのまま東京湾に埋め立てているという。

今回、東京 23 区からのごみの最終処分地である東京都廃棄物埋め立て処分場の訪問・見学をメンバー全員で行った。まず、環境局職員の方による埋め立て処分場についてのガイダンスを受け（写真 4）、次に、マイクロバスに乗り込み、埋め立て処分場内を移動しながらご説明をいただいた。

私達は、そのスケールの大きさや、ごみ処理の工夫、そして私たちのごみの最終処分をめぐる大きな課題を目の当たりにして大きな衝撃を受けた。

【埋め立て処分場が抱える課題と対策】

①埋め立て処分による公害…埋め立て処分場は廃棄物の飛散や臭気拡散、害虫の発生、火災などの課題があったが、サンドイッチ工法など埋め立て方法の工夫を重ねることで課題を改善してきた。

②埋め立て処分の限界…東京湾の埋め立て処分場は、これまで増設を重ねてきたがいよいよ限界まできているという。1977 年から埋め立てが開始された中央防波堤外側埋立処分場（199ha）がいっぱいになり、並行して 1998 年より新海面処分場（319ha）への埋め立てが開始されている。しかし、東京湾にこれ以上の埋め立て処分場を建設す

る余地はなく、今ある処分場をいかに延命させるかが課題となっているという。（写真 5）



写真 4 環境局職員の方によるガイダンスの様子



写真 5 中央防波堤外側埋立処分場で説明を受ける様子

Ⅲ. 学業報告会当日

報告会当日は、それぞれの探求をポスターにまとめて報告した。（表 3）

表 3 探求テーマとメンバー構成

探求テーマ	メンバー構成
ゴミの分別について	中 2 : 3 名
ごみを減らすためのリサイクル	中 2 : 2 名 中 1 : 1 名
学園の川の中にはマイクロプラスチックは存在するのか？	中 3 : 2 名
男子部の食品ロスから考える	中 3 : 3 名
地球温暖化とマイクロプラスチック	中 3 : 1 名 中 1 : 3 名

Ⅳ. おわりに

「なぜ、当たり前のように捨てられるのか？」という問いから始まった今回の探求活動は、ごみ

処理に関わる様々な人々との対話の中で深まり、広がっていった。見えてきたのは、ごみ処理の幾重にも重ねられた工夫であり、また同時にその限界だった。東京湾の埋め立て処分場はおよそ 50 年で一杯になると推計されている。

今後の社会を担っていく中学生とこの課題の探求に臨めたことは大変貴重な機会だった。彼らの今後の更なる探求にも期待したい。

V. 参考文献

- ・「ごみ育 日本一楽しいごみ分別の本」滝沢秀一 太田出版 (2019)
- ・たまエコニュース,2019年 6月号 vol.73
- ・柳泉園組合見学のしおり(2019)柳泉園組合
- ・東京都環境局(2019)「東京都廃棄物埋め立て処分場パンフレット」東京都廃棄物埋立管理事務所